

## 「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第6巻 アジアを みる目

著者	信田 敏宏
図書名	梅棹忠夫：知的先覚者の軌跡 = Umesao Tadao : an explorer for the future. 特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会編.
開始ページ	135
終了ページ	135
出版年月日	2011-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009076">http://hdl.handle.net/10502/00009076</a>

## アジアをみる目



\* アジアをみる目 \* 東南アジア紀行  
 \* 東南アジア—歴史と旅  
 \* 東南アジア点描

一九五七年一月、梅棹忠夫率いる第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊がタイに向け出発した。梅棹は六カ月のあいだタイを拠点にカンボジア、南ベトナム、ラオスを駆け巡った。一九六二年、梅棹は再びタイを訪れ、その後、ビルマ、インド、ネパール、東パキスタン(現バングラデシュ)の国々を訪問した。梅棹が訪れた村や町は、一九六〇年代以降、ベトナム戦争やカンボジア内戦など世界史上稀に見る殺戮の舞台となった。時代的に言えば、梅棹は、動乱と動乱との間のつかのまの平和な東南アジアを訪問したことになる。

自らの足で歩き、自らの目で見るといふ梅棹流「探検」の手法は、東南アジア調査でも果敢に実践されていた。また、フィールド・ワーカーとして成熟期にあった梅棹のオーガナイザーとしての活躍ぶりもきわだっていた。さらに、梅棹は車にたくさんの本を積み込み、移動中の車内でも本を読み進めていた。この「移動図書室」のエピソードからは、フィールドを見る確かな目と文明に対する深い洞察力が、膨大な文献の読破によって培われていたことがうかがい知れる。

ちなみに、この探検旅行には若き日の石井米雄も同行しており、梅棹と石井の交流の原点を後世の人びとは改めて知ることになる。本書のコメントにおいて、石井は梅棹を「東南アジア研究のパイオニア」と評している。

本書は二度にわたる東南アジアへの調査旅行をもとに書かれた研究成果をまとめたものである。とりわけ、単行本を収めた「東南アジア紀行」は、東南アジアの歴史や文化、そして人びとの生活を伝える旅行記にとどまらず、調査の準備段階から政府役人との交渉、遭遇した数々の事件、学術調査隊の「内幕」、研究の着想、文明的思索にいたるまで、海外調査にまつわるあらゆる経験を詳細に記述した貴重な学術的記録でもある。

簡潔にして明瞭な表現、視点のおもしろさ、随所にちりばめられたユーモア、そして何よりも訪れた土地に対する愛情あふれる文章から、梅棹ワールドの真髓が伝わってくる。(信田敏宏)